

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.12 (2013  
年6月号) ◆

梅雨も明けて真夏の暑さが続く日々、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。四月に刊行されました13号はすでにお読み頂けたでしょうか。なお、購読を継続されている会員の中で9月からの新年度の会費を納入されていない方は、お早めにお納めいただきますようお願い申し上げます。また、次の14号の投稿原稿は、今年の9月末が締切です。皆様の優れた論考をお待ちしております。このニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイトとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

**【第77回20世紀メディア研究会】(6月29日午後2時半～5時半)**

・アンニ「満州映画館の変遷と日本映画の上映」：1906年(明治39)に大連で岡山孤児院一行の慈善活動写真会で「旅順口海戦」などが上映されて以降の、満州での映画上映について文献に基づき明らかにする報告であった。1910年代にはハルビンや大連で常設の活動写真館ができて、M・パテー社が洋画の多くを上海から輸入したが、アメリカ映画と中国映画の娯楽作品が中心で、上映の九割はアメリカ映画で邦画は一割程度と不振だった。満州の日本映画常設館は在満日本人のためのものであり、日本と同様の配給が行われた。1930年代には左翼的映画も上映されたらしい。1937年に満映が設立されたが、李香蘭は満人にはあまり受けず、エノケンの方が人気だった。また1941年以降は日本国内と同様の配給体制が敷かれたことなどが指摘され、今後は朝鮮における映画上映との関連を明らかにすべきであるとの課題が述べられた。

・島田顕「大祖国戦争勃発直後のコミンテルンの音声プロパガンダ強化策」：1941年6月の独ソ開戦以降、ソ連が行った対外ラジオ放送について、各種の文書から迫った報告。コミンテルン、タス通信、モスクワ放送、情報ビューロー、全連邦ラジオ委員会などの各組織と、各種の番組放送の関係を示す文書の中で、リ・クヤ(野坂参三)が中国から日本語でのラジオ放送のために延安に入った事情などが示され、論じられた。

・有馬哲夫「日本はソ連参戦を知っていた」：昨年八月十五日に放送されたNHKの番組「なぜ早く決められなかったのか」に対し、暗号文書ウルトラの内容の意味するところをヤル

タ会談の内容や欧米の文書、日本の指導者側の記録から丁寧に吟味した上で、「ソ連が参戦の意思を持っているかどうか」という情報は、天皇制を残すことに執着していた日本の指導者にとっては、二次的な意味しか無かったと反駁した。

※なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。

<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html>

(閲覧は『Intelligence』の購読会員に限定されています。)

●次回の20世紀メディア研究会は、7月20日(土)–21日(日)の両日にわたって、国際シンポジウム「日本と東アジアにおける検閲史再考」を開催致します。初日の土曜日には、太平洋戦争の戦前・戦中期に関する第一部を、二日目の日曜日には占領期・戦後に関する第二部という構成です。安野一之、ジョナサン・エイブル、高栄蘭、河原功、中野正昭、山本武利、小林聡明、何義麟の総勢八名の研究者がご報告の予定です。また、夏休み後の研究会は、10月5日(土)の予定です。なお、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

#### 【今月のコラム―気になる新著】[敬称略]

野中郁次郎編著『戦略論の名著』(中公新書)は、孫武『孫子』、マキアヴェリ『君主論』、クラウゼヴィッツ『戦争論』の三大古典から、毛沢東、石原莞爾、さらにドールマン『アストロポリティーク』に至るまでの厳選12冊の概説と背景を紹介した本。堤美果『(株)貧困大国アメリカ』(岩波新書)は、グローバル企業による戦略の下で、買収されたも同然の商業メディアに対抗するアノニマスやウィキリークスの目指す方向が明示されて興味深い。福間良明ほか『戦争社会学の構想―制度・体験・メディア』(勉誠出版)は、研究領域を横断した意欲的な分厚い研究書である。

[7月11日付文責：土屋礼子]